

## SPF 豚の逐次変換農場の実例

(有)小黑養豚 小 黒 良 一

当農場は、群馬県でも飼養頭数の9割が集中する県の中西部に属し、群馬県と埼玉県の間境に位置しており大変養豚の盛んな地域である。当農場は、昭和55年に150頭の一貫設備を新設し現在に至る。当初は県の畜試よりL種の純系、W種の精液を導入して自家繁殖によるLW生産を行ってきたが、昭和56年に日本に初めてオーエスキーが侵入したのち、全国的に浸潤し平成元年には、県全体に広がったために優良な種豚の導入が困難な状況になった。

このような状況下で、今後の養豚経営を考え、優良な種豚の導入による、生産性の向上及び肉豚の有利販売等を目指すべく住友SPFへの切り替えを行った。

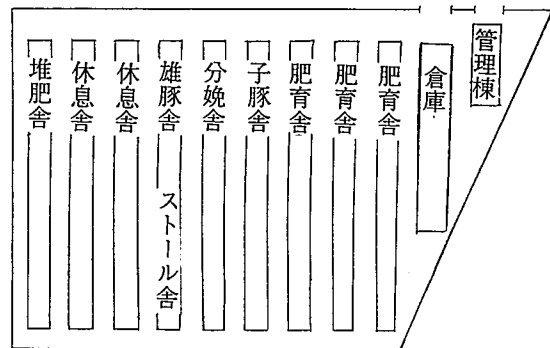
変換方法は、平成2年度よりコンベ豚を順次淘汰していき、平成3年に豚舎を1棟オールアウトした後、導入を開始した。種豚の入れ換えは、2年をかけて行い全て切り替えを完了した。切り替えを行い今年で3年目を迎えたところである。

### 1. 農場レイアウト

当農場のレイアウトは、下記のように、ストール3棟、分娩舎1棟、子豚舎1棟、肥育舎3棟により構成されており、子豚舎以降は糞尿処理の関係上オガ粉豚舎である。

また付近に幹線道路が通り、都市化も進んでいるため今後も公害問題については、十分留意しなければならないという課題もある。

小黑養豚場略図



### 2. 飼養管理

#### (1) 分娩舎

管理面にて一番注意していることは、分娩舎の母豚にいかにも多くのエネルギーを摂取させ、泌乳力の向上を図ることである。

また、哺乳子豚にいかにも多くの人工乳を摂取させ活力のある、抗病性のある豚を作るかである。そのために、下記のような項目にポイントをおいている。

- ① 分娩舎母豚用の高エネルギー (TDN76) 飼料の給与。
- ② 1日2～3回に分けて食い切らす。
- ③ 母豚、子豚共に十分に水を飲ませる。
- ④ 哺乳子豚の早期餌付け。

上記の項目については、基本的な項目ではあるが徹底することにより、母豚の離乳後の発情再帰、子豚の発育も順調になるためすべての面で良好な成績が期待できる。当農場では、平均28日齢離乳後、2週間は、分娩豚房に収容しているため、離

乳後も発育は順調で90日齢の子豚の平均体重は、40~45kgである。

(2) 子豚舎, 肥育舎

子豚舎, 肥育舎へ移動の際は、雌雄別飼を実施しているために、群のバラツキも少なく、また事故率も軽減された。

子豚舎以降については、先にも述べたようにオガ粉豚舎のため、寄生虫対策は徹底して行っている状況である。

(3) ワクチンプログラム

現在、接種しているワクチンは、下記の通りである。

(種 豚)

日本脳炎, パルボ, オーエスキー

(肉 豚)

豚コレラ, 豚丹毒, ヘモフィルス, オーエスキー

(4) 投 薬

投薬については、広範囲の添加剤を移動時等に予防的に使用するのみであり、注射薬はほとんど使用していない状況である。

3. 農場成績

当農場の農場成績は、下記に示した通りである。

コンベより、変換後の成績を比較したが、平成2年度よりSPFの変換を行ってきた関係上、データとしては不十分なため、2~3年度の成績は省略した。

4. SPF後のメリット

- (1) 母豚1頭当たりの平均離乳頭数が、1頭増加した。産子数の増加及び哺乳期間の事故の軽減がはかれた。
- (2) 1母豚当たりの年間出荷頭数の増加。今年度は9月までのデータしか出ていないが、

(有)小黒養豚場農場成績

		昭和63年	平成1年	平成4年	平成5年9月末
繁殖部門	稼働母豚数	140.3	142	123	120
	SPF導入		(平成3年度125頭導入)	15	26
	離乳頭数	2,900	2,910	2,646	2,060
	1腹当たり	9.4	9.3	9.8	10.4
肥育部門	出荷頭数	2,483	2,456	2,275	2,620
	1母豚当たり	17.7	17.3	※SPFの変換	21.9
	(事故率)			中のため不明	
	離乳→出荷	14.4	15.6		3
	出荷日齢	200	205	182	180

- ・肉豚出荷頭数は、年間出荷頭数を稼働母豚数で割った数字である。
- ・平成5年の出荷頭数は、残り四半期の1/4を加算し計算した。
- ・事故率は、離乳→出荷迄の肉豚死亡・淘汰頭数を離乳子豚総頭数で割って計算した。

現在の在庫頭数を見て推定すると年間母豚当たり22頭の出荷成績が望め、大幅な改善が行えた。

- (3) 離乳後の子豚、肥育豚の事故率が大幅に減少し、現在は、離乳→出荷の事故率は平均して3%程度である。
- (4) 疾病の減少と出荷頭数の増加により、肉豚1頭当たりの衛生費が大幅に削減された。
- (5) 肉豚の平均出荷日齢が、1ヵ月近く短縮されて要求率の改善が行えた。

## 5. 今後の課題

SPF転換により生産性は向上したが、今後の養豚経営を考えた上で様々な問題点も残されているのが現状である。

(1) 大きな問題のひとつは、農場周辺の都市化に伴う公害問題である。この問題については、当農場だけでなく畜産業全般にいえることであるが非常に大きな問題であり、避けて通ることは出来ないのが現状である。現在、子豚舎、肥育舎についてはオガ粉式豚舎を採用しており、糞尿処理及び悪臭についての問題はないが、長期的視野で考えた場合、不安は残る。

今後は、公害問題の発生しないような、処理施設の必要性も生じるだろう。

(2) 豚価の低迷と輸入肉との競合

### ① 生産コストの低減

今年度は、豚価の堅調な動きもなく、海外からの輸入も増えているため低豚価であった。

また将来的に見てもいままでのような高相場は期待できず低調な相場が予測される。このような厳しい社会情勢の中で生き残るためには、生産性の向上を第一に考えて、いかに1頭当たりの生産コストを下げることが重要課題となる。また消費者のニーズにあった肉作りを行い、いかに有利販売を行っていくか考えることも重要である。

現在、肉の販売面に関しては、SPFを展開している同業者と出荷組合を組織して差別化を行った上で、市場に出荷している。出荷を始めて1ヵ年になるが評価も得てきている状況である。

私も、養豚を始めてはやくも18年になるが、始めた当初と比較して養豚を取り巻く環境も社会情勢も、当時とは比べ物にならない程変わった。養豚業を取り巻く環境が、輸入の拡大、公害問題等益々厳しくなっていくのは否めないが、変革に対応できないようでは生き残ることが出来ないであろう。

コンベよりSPFに変換して生産性が改善され、農場成績は向上した。また、現在肉の販売に関しても、SPFとしての差別化により有利販売が行えている状況である。そして、何よりも出荷組合内の情報交換及び研究会等を行い、SPF生産者同士の絆を深め、来たるべく厳しい時代に備えたい。